

（第 3 種郵便物認可）

大分大学病院の医師と薬剤師

大分大学病院の認知症先端医療推進センター（センター長・津村弘院長）と薬剤部（伊東弘樹教授）は、医師と薬剤師が連携して、「もの忘れ外来」を受診した認知症患者に服薬指導をしている。認知症患者は薬の飲み忘れが多いとされており、患者本人だけでなく、家族や介護者にも指導して服薬の徹底を呼び掛けている。複数回の指導を受けることで薬への理解も深まり、服薬の習慣が身に付くなどの効果が出ている。

服薬指導は昨年 8 月から始めた。薬剤師がもの忘れ外来の診察室に向いて指導をしている。薬を飲んでいなかったり、初診でも担当医から指導が必要と判断された患者や家族、介護者が対象。薬剤師が薬の効果や必要性を説明するほか、服薬中の別の薬との飲み合わせを確認してアドバイスする。実際に処方する院外の薬局には「お薬手帳」や処方箋に注意事項を記入することで情報を共有している。

4 月末までに 85 人を指導。当初は服薬の管理ができていなかった患者の中から複数回指導を受けた 18 人について、服薬状況の変化を調べたところ、3 カ月後に約 3 割、半年後は 8 割で改善が見られた。改善できなかった 2 割は、家族や介護者の協力が得られないなど特別な事情があるケースだったという。

もの忘れ外来の担当医は「診察室で服薬指導ができるため、患者に関する情報のやりとりがしやすくなり、安全に治療ができるようになった」と話す。大分大病院の患者は遠方から通院する人が多く、ほとんどの患者が自宅の近くの薬局で治療薬をもらう。そのため薬を受け取る際に窓口で注意点を説明を受けるのは難しい。大分大病院は、患者の服薬管理や悪い飲み合わせの副作用を減らすと、今年から外来で受診した患者の処方箋に

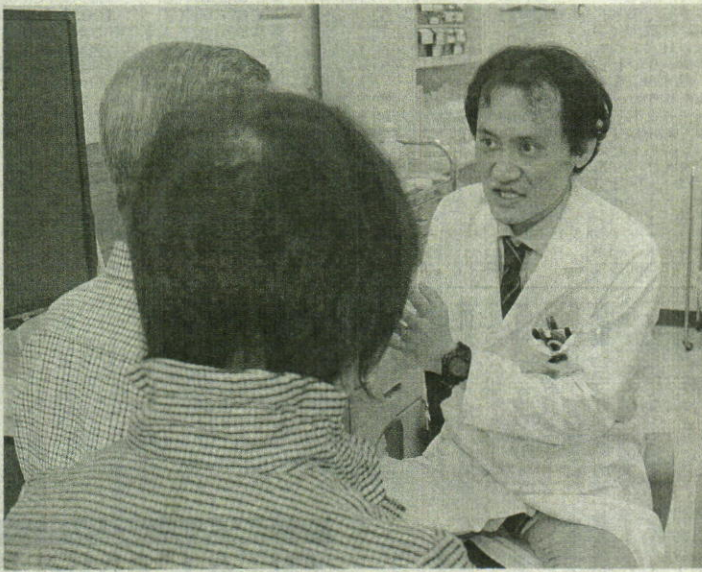
認知症先端医療推進センター



認知症の新しい診断法や治療法の研究のほか、介護職や行政との連携を進めようと昨年 4 月に設立した。県や臼杵市、東芝と生活習慣と身体的特徴との関連を調べる共同研究をしたり、脳電子放射断層撮影装置（PET）を使った原因物質の研究、新薬の開発などを進めている。

身長や体重、血液検査で調べる肝臓や腎臓の検査値などの身体情報を処方箋に記入。院外の薬局と患者情報の共有を進めており、地域で連携して服薬指導に当たる体制づくりに力を入れている。伊東教授は「複数の病院から処方された薬を管理しきれない患者も多いが、情報を一元管理できることで、必要のない処方や無駄になる薬も減らせる」と手応えを感じている。津村院長は「8 割の患者で改善が見られたのは大きな成果。継続的に飲む必要がある高血圧や糖尿病などの病気でも服薬指導の効果が見込める。他の診療科や地域の薬局と連携してさまざまな病気で服薬指導ができる体制整備をしていきたい」と話した。（小田原大周）

認知症治療の服薬指導に効果



認知症患者や家族に薬の効果や重要性を説明する大分大学病院薬剤部の佐藤雄己副部长。大分大学病院もの忘れ外来

家族、介護者にも徹底呼び掛け

薬への理解深めて

患者の「やる気」引き出す

薬の効果が見えつらかったり、飲み忘れが続いたりして自己判断で服用をやめる患者は多い。服薬の継続には、薬の効能や必要性を理解して積極的に服薬を続ける患者の「アドヒアランス」（執着心、やる気）を引き出すことが求められる。特に認知症を根治できる薬はなく、症状を和らげたり、進行を抑えることに治療の主眼が置かれる。病状は徐々に進行するため、効果が分かりづらく途中で服用をやめる患者や家族が多いとされる。大分大学病院薬剤部の佐藤雄己副部长は「薬を渡すときの窓口での説明だけではしっかり伝えきれない部分があるので、診察時の指導が必要になる」と指摘。「患者の薬への疑問や不便に思っていることなどに耳を傾け、解決策と一緒に話し合うことが薬への理解を深める」と取り組みが服薬の意欲につながっていることを強調した。

大分大学病院の認知症先端医療推進センターは、医師と薬剤師が連携して「もの忘れ外来」を受診した認知症患者に服薬指導をしている。認知症患者は薬の飲み忘れが多いとされており、患者本人だけでなく、家族や介護者にも指導して服薬の徹底を呼び掛けている。複数回の指導を受けることで薬への理解も深まり、服薬の習慣が身に付くなどの効果が出ている。